

「実践と研究の循環を考える-研究者対象としての経験がある社会福祉実践者としての立場から-」

三重県松阪保健所 山本 綾子

## 1. これまでの経験

演者は、日本福祉大学社会福祉学部を卒業後、精神科病院の精神保健福祉士として福祉の現場へ出た。数年後、地域の事業所で地域移行支援事業に従事。その後、県立精神科病院にて若者支援に従事した。この時に、中学生・高校生を対象としたメンタルヘルスリテラシー教育に出会い、プログラムの開発、啓発教育の実践、普及等に取り組んだ。同時に、若者支援に従事する中で「研究」という視点に触れ、実践の根拠を示すことの必要性を体感し、日本福祉大学大学院（通信課程）に進学した。その後も実践を続けながら、精神保健福祉の現場で様々な活動に取り組んでいる。現在は、保健所にて精神保健業務に携わっている。

## 2. 研究テーマと背景

研究テーマ「メンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発及び効果検証」

本テーマに取り組もうと決意したのは、何よりも実践の根拠を示したいという思いからである。演者は、当時所属していた精神科病院において、中学生、高校生を対象としたメンタルヘルスリテラシー教育を実践し、主にプログラム後の生徒へのアンケート調査を通して、生徒の反応や、教員からのフィードバック等から得られた結果をもとに、メンタルヘルスリテラシー教育の必要性や、生徒がどのようにメンタルヘルスリテラシー教育を捉えているかを報告していた。

プログラムが目指したものは生徒が精神的不調に陥った時の援助希求行動の促進であるが、プログラムによってどのような効果があるのか、生徒の援助希求行動の促進に効果があるのかは明らかにできておらず、プログラムの効果検証は課題として残されたままであった。

そこで、多職種チームで開発した、精神保健教育プログラムの効果検証を行い、その有効性を明らかにすることは、メンタルヘルスリテラシー教育プログラムのエビデンス蓄積の一助となり、国内でメンタルヘルスリテラシー教育を普及させていくためのモデルプログラムの提示と、その方法論の提言となると考え、修士論文で取り組むことを決意した。

## 3. 得たものと課題

根拠を示すことで、必要性がよりわかりやすく伝えられること、普及していくための足掛かりになる手ごたえを感じることはできた。現場レベルでの普及が進む中で、残された課題は、効果を示し、必要性を提言したこの実践をさらなる普及、つまり事業や施

策化していくことであった。

また、この研究は多くの学校関係者をはじめとした協力者のおかげで取り組むことができた。当時は、より多くの関係者にこの取り組みの必要性を理解してもらいたい、伝えたいという思いと、中学生や高校生へ届けたいという思いでいっぱいであった。地道で継続した活動の中で、少しずつ理解者や協力者が増えていったのは、日頃からの相談支援や多機関協働の結果だと考える。多忙な実践現場の方々が、なぜ研究に必要な調査に協力してくれるのか、そこにどのような思いや期待を抱いてくれているのかを改めて振り返る必要があると感じた。

#### 4. 研究に取り組んだからこそ現在の立場から

大学院で研究への姿勢を学び、取り組んだことで、現場実践においても視野や考え方、物事のとらえ方の幅が広がった。大学院修了後も、実践の中で感じる疑問、課題、その解決に向けて多職種連携や現場の実態調査などに取り組み、発信してきたが、その「目的」、結果から「何を目指すのか、何に取り組めるといいのか」、そしてその先に「どのような未来を望むのか」を意識するようになった。この意識は、調査や研究場面だけでなく、現場実践においても確かな基盤となっている。事業を実施していく中でも、「目的」を意識することで、何を目指していくかを関係者と繰り返し共有し、協働していくことに繋がっている。

その一方で、研究への協力や実践者としての意見を求められる機会もいただいている。協力する立場からは、やはりこの研究がどこへ繋がるのかということを考える。研究に取り組んでいる方が、何を目指し、どうなってほしいと未来を描いているのかが伝わることで、自分たちの現場実践が社会をよりよくする一助に繋がっていくという実感を持てるのではないかと感じている。

研究と現場実践が別世界のものではなく、繋がっているという感覚を研究者、協力者である実践者が共に持つことで、現場と研究の循環、協働作業がより促進されるのではないかと考える。

#### 5. 伝えたいこと

取り組んでいる研究が役に立つのか、今すぐ何か解決や具体的な変化に繋がるのかは「今」はまだ見えないこともあるかもしれない。しかし、それを決めるのは「未来」の現場や社会なのではないだろうか。役に立つ、立たないという視点や考えではなく、研究が現場実践を根拠立てるものとして現場と研究者が共に捉えることで、だからこそその現場と研究者との協働作業となり、未来へ繋がっていくものだと演者は考える。

